科学研究費助成事業（基盤研究（Ｓ））研究進捗評価

課題番号	16H06318	研究期間	平成２８(2016)年度 ～令和２(2020)年度
研究課題	「アフリカ潜在力」と現代世界の困難の克服：人類の未来を展望する総合的地域研究	研究代表者 （所属・職） （令和４年３月現在）	松田 素二 （京都大学･アフリカ地域研究資料センター･特任研究員）

【令和元(2019)年度　研究進捗評価結果】

評価		評価基準
	A＋	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
○	A	当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
	A－	当初目標に向けて概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
	B	当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である

（意見等）

本研究は、「アフリカ潜在力」の問題解決能力を現場から明らかにし、かつそれを理論化して人類社会共通の財産としての新しい人類知の抽出を目標とするものである。

３研究系７共同研究班の研究組織は、12 回の全体会議等を通じて連携が図られている。「アフリカ潜在力」の概念は、３回のアフリカフォーラムで「土着性」「普遍性」「未来性」をサブテーマとして議論が深められ、欧米のアフリカ学会や世界社会科学フォーラムなどで認知度が高まっているほか、日本での東南アジアやオセアニアに関する地域学会での比較検討も進んでいる。また、公開講座、新聞などを通じた社会への成果発信も十分に行われている。

【令和４(2022)年度　検証結果】

検証結果	
A	当初目標に対し、期待どおりの成果があった。 特筆すべき研究成果としては、日本とアフリカ双方から多数の研究者が編者として参加して、アフリカの出版社からシリーズとして刊行された英文論文集であり、これは十分に期待に応えた成果である。新型コロナウイルス感染症の流行以降はそれらの編集作業等を通じて、流行以前はアフリカ各地でのアフリカ・フォーラムや京都フォーラムの開催、国際学会での発表等の積極的な活動を通じて、多くの研究者が持続的に交流しながらユニークな人的ネットワークが構築された点も重要な研究成果である。 さらに、大学院生を中心とする次世代研究者に対する有益な支援が継続的に行われ、国際的な若手の共同育成が実現されていることも、高く評価できる点である。